Bulletin of Kansai University of Nursing and Health Sciences. Vol. 9, No. 1, pp.40-48, 2017

資料

社会的な動向からみる現代の自己
―第9回対話的自己国際大会の議論から―

Contemporary Self from the View-point of Social Movements
"Some Discussions from the 9th International Conference on the Dialogical Self"

クロハ・カテリーナ
関西看護医療大学　看護学部

Kateryna Kuroha
Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing

要旨：2016年9月ルブリン市にて開催された第9回対話的自己国際大会に参加した。これは，H.Hermansらの提唱する対話的自己論の視点からさまざまな社会学的並びに心理学的課題について議論することを目的としており，2年に一回行われている。対話的自己論は社会全体の中で見て取れる多くの過程が「こころの社会」として自己の世界においても位置付けられているという主張を軸のひとつとしている。本稿では，現代社会ならではの多様性や多義性が生み出すマルチなアイデンティティと，コインの裏側的現象としてのラジカル化されたアイデンティティやうつ病の発症という現代人の自己のありようについて，本大会でなされたいくつかの議論について報告する。

キーワード：対話的自己論，アイデンティティ，現代社会
Keywords：Dialogical Self Theory, Identity, Contemporary Society

I. はじめに

2016年9月7日～10日の4日間にわたり，ポーランドのルブリン市にて第9回対話的自己国際大会が開催された。ルブリン市は様々な民族文化や宗教のぶつかり合いや共存，統合を重ねてきた歴史があり，第二次世界大戦のホロコーストの象徴でもあるマイダネック強制収容所がある。そうした独特な雰囲気の中で現代の社会や個人の自己のありよう，そしてそこにある対話性に関する多面的で深い議論に参加した筆者は多くのことを学ぶ機会を得ることができた。この場を借りて，対話的自己論，そして，今回の国際大会について報告したい。

図1　ルブリン市，旧市街に向かう道市場のにぎわい

図2　マイダネック強制収容所入り口のモニュメント

II. 対話的自己論の紹介

対話的自己とは，H.Hermansらによって1992年の雑誌“American Psychologist”で提示された比較的新しい自己論であり，W. Jamesの自己論をM.Bakhtinのポリフォニー小説の概念的枠組み，特に「多声性（multivoicedness）」と統合させている。

1. ポジション

Hermans & Kempen（1993/2006）によると，自己の世界には多数のIポジション（I position）（以下，ポジションと記）が存在している。例えば，個人の自己の世界における多数の「私」である「大学生の私」「娘の私」「高校では勉強が苦手だった私」「看護師を目指す私」「実習が不安な私」「コーヒーが好きな私」などがポジションとして理解される。また，いわゆる自己の外側にある他者やモノなども，ただそこにあるのではなく，多くの場合，個人によって内在化され自己の世界を構築している。例えば，「応援してくれる母」「指導が厳しいA先生」「気さくな患者Bさん」「協力的でない同期のCさん」「好きな缶コーヒー」などである。対話的自己論においては，これらも全てポジションとして変換され理解される。

2. 対話的関係

こうしたポジションは比較的独立しているが，それぞれが持つ声（voice）によって関係づけられており，これを対話的関係（dialogical relationship）と呼ぶ。声を持つことによってポジションの間で語りの場が生じているのである（Hermans & Kempen，1993/2006）。

先の例を用いると，実習を前にして不安になっている学生の自己の世界では「実習が不安な私」と「指導が厳しいA先生」という2つのポジションが互いに共鳴しあっていることだろう。これでは，過度な不安により実習がうまく進まないことは想像に難くない。

一方で，「看護師を目指す私」が反論の声を持ってその対話的関係に参加した場合，どうなるだろうか。学生はただ不安に飲み込まれるのではなく，不安と看護師を目指したい気持ちとの間に葛藤が生じると考えられる。さらに，「気さくな患者Bさん」「応援してくれる母」といったポジションも参入することで，学生は不安を持ちつつも，より自信をもって実習に取り組むことができるようになるかもしれない。

自己の世界にある「私」や他者，モノがポジション，つまり「位置づけ」として理解されていることの理由はこの対話的関係の概念にある。あるポジションは他のポジションに対して特定の立場を取る（位置づける）のであり，それにより賛成や反論，誤解や理解，抵抗や否認，疑問を持つなどの関係性が生じるのである（Hermans & Kempen，1993/2006）。ポジションは自己が多次元化されていることよりも，自己が特定の立場に立ってその存在を位置づけうることを中心的な意味とするのである（溝上，2008）。

3. 支配性

Hermans & Kempen（1993/2006）によると，個人の中にどのようなポジションがあるかどうかよりも，それらの対話的関係を見ていく方が自己のありようをよりダイナミックに捉えることができると述べている。その点においてポジションの支配性（dominance）という概念が重要となる。つまり，自己の世界にある多数のポジションのうち，あるときはＤのポジションがより支配的で，別の時にはＥのポジションがより支配的になるように，それぞれのポジションは常に同じ強さで存在しているわけではなく，支配性が移り変わることが特徴的である（溝上，2001）。

4. 社会と自己をつなぐ対話的自己

対話的自己論はいくつかの展開を得ており，現在は，社会全体の中で見て取れる多くの過程が「こころの社会」として自己の世界においても位置付けられているという主張を軸のひとつとしている。今回は，この主張を中心に第９回対話的自己国際大会で展開された幾つかの議論と研究報告を紹介したい。そのため，対話的自己論が持つさらにいくつかの理論的枠組みについて，それらが特に詳しく解説されている Hermans & Hermans-Konopka（2010）の著書を元に簡潔に述べる。

Hermans & Hermans-Konopka（2010）によると，自己は何か先天的で，それそのものとして存在しているのではなく，また，社会はそうした自己に対して促進または妨害的な環境として作用するだけの文脈として存在しているのではない。自己は「対人的，歴史的ならびに社会的なプロセスにおいて創発し，個人－社会といういかなる二分法を超越して捉えるべきもの」（筆者訳）である。そして，その視点に立った時，自己が空間，そして時間という２つの軸において拡張していることの描写が必要になる。

1）空間的な拡がりを見せる自己：グローバル化とローカル化

グローバル化が進む現代において，個人は異なる伝統，価値観と実践を内包する様々な文化と出会い続ける。そして，社会において文化同士のぶつかり合いや統合が起きているように，個人の自己においてもそうした複雑な過程が反映される。それは，国家や民間レベルの国際関係をはじめとし，マスメディア，旅行やインターネットなどを通して世界の向こう側にいる相手に対して自己をオープンにしてゆくグローバル的な動きだけではない。他文化を知ることは自文化を再発見し問うことでもあり，また，いつでも相手とつながれるということはいつでも相手に侵入されうる危険性を持っていることでもある。そうした中で保守的に自己を閉ざしていくローカル的な動きに関与することも然りである。

社会的なプロセスとして捉えられがちなグローバル化とローカル化は，もちろん自己の社会においても反映されるのだが，それはアイデンティティの混乱や，自己のより高次な統合を先導する。そうした文脈においては，自己と社会の双方における複雑さ，多様性，流動性，多義性，予測不可能性が生じた際に直面せざるを得ない不定性（uncertainty）を自己がどのように体験し，克服するかが重要となってくる。

2）時間的な拡がりを見せる自己：伝統的・モダン的・ポストモダン的自己

自己は個人のみならず社会や人類全体が持つ歴史とも深い関係にある。対話的自己論によると，歴史的な段階が変わるのと同様に，自己も伝統的・モダン的・ポストモダン的の３つに識別することが可能である。

伝統的な自己とは，不完全な存在としての人間や現世と，完全な存在としての神や来世の区別，スピリチュアルな生き方を妨げるものとしての肉

体の位置づけ，道徳的なテロスの存在，厳格な社会階層と権威，自然環境との繋がりといった特徴を持っている。

モダン的な自己は，理性の発達ともに普遍的な真実を主張し，事実と価値，科学と信頼，政治と宗教，実践と理論を分離していく姿勢を特徴とする。そして，内的に統一された自己像を求める代わりに他者との間にある厳格で鋭い境界を引く傾向を持っている。

そして，ポストモダン的な自己は広範囲な脱中心化を反映している。普遍的な価値や象徴に対して非常に懐疑的であり，全体性と単一性をはじめとし，何が真実で何が偽りかという問いを明確にせず，多様かつ流動的なあいまいさを良しとする傾向を持つ。

Ⅲ．第９回対話的自己国際大会に関する報告

個人の自己の世界において多数のポジション，特に自分の存在を問う，アイデンティティ的なポジションが複数存在しているということは，ある種の危険性を伴う。つまり，「自分とはこういう人間なのかもしれない」という視点や考え，感情や感覚，可能性などがひとつ以上あるということは「不安定で緊迫した空間（field of tension）」の創発を示唆させる。この不安定で緊迫した空間が自己にとってどのような危険性や可能性を持っているのかが，今回の大会の主なテーマとなっていると感じた。

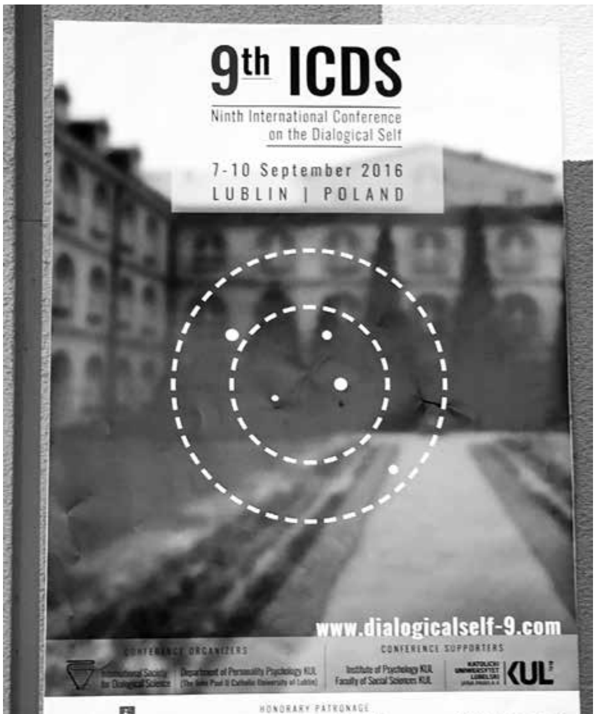

図３　第９回対話的自己国際大会案内ポスター

基調講演の中でHermans（2016）は，現代社会において特に注目していく必要があるものとして，①多文化アイデンティティ（Multicultural identities），②多人種アイデンティティ（Multiracial identities），③トランスジェンダー・アイデンティティ（Transgender identities），④ラジカル化されたアイデンティティ（Radicalizing identities）を挙げた。それぞれのアイデンティティに関するHermans（2016）の主張について，筆者が知りうる日本での研究動向と交えながら紹介していきたい。また，現代病として位置づけられている非定型うつ病に関する研究のひとつにも触れる。

1．多文化アイデンティティ

日本において，異文化接触に対する心理学的な関心が向けられようになってきたのは1960年代であり，その後，箕浦康子の研究を中心に海外帰国子女や海外在住日本人，留学生などの多文化のはざまで生きる人たちの異文化適応や文化的アイデンティティ[1]への注目が広まった。ただし，一度形成したら一生変わることがない静的概念としてアイデンティティが捉えられていた時代背景もあり，「○○人としてあるべき」文化的アイデンティティが異文化によって浸食されるのかどうかという問いが，主な関心を集めていたようである。その後，研究対象が国際児や中国残留孤児，在日外国人などへと広がり，また，質的研究が深まりを見せてくると，混合または第三のアイデンティティ（Murphy-Shigematsu，2004；堂本，1987）や，「おれ人」「ノーアイデンティティ」などの脱文化的なアイデンティティをはじめとし，戦略的に活用され（李・田中，2010），個人の感覚として，あるいは，周囲から求められるアンビバレントなイメージへの対応として常に調整され，変化し続ける文化的アイデンティティ（末田，2012；知念，2008）に関する報告が増えてきた。そして，ここ20年間では文化的アイデンティティが，①生涯に渡って形成かつ模索され，②個人が置かれた文

脈に対応して複数あるアイデンティティの中から選択され，③全体的なアイデンティティにおいて適宜位置付けられるもので，④個人は，その多様な文脈により文化的アイデンティティとして内在化する事象を選択している，という捉え方が日本において定着しつつあると思われる（原，1995；関口，2003；鈴木，2008 など)。

現在，多くの大学や企業ではグローバルな人材を育てるという課題を掲げることがひとつのトレンドであり，また社会的な必然性となっている。マスメディアでは多文化アイデンティティ[2]の課題を秘めているだろうタレントを見ることもふつうのこととなった。しかし，グローバル化に馴染んでいるかのように見えて，多くの場合そこには何かしらのステレオタイプ化や理想化のプロセスが根強く働いており，多文化アイデンティティが秘める「不安定で緊迫した空間」，つまり葛藤や混乱などの揺らぎのプロセスに十分な意識を向けられる社会であるとは言い難い。特に，多文化アイデンティティはその人個人の問題であるという捉え方が一般的であるという印象を受ける。

Hermans（2016）によると, 多文化アイデンティティは，個人の体験をベースとした対話と，内在化されたマジョリティーの声との対話というふたつの過程の上で成り立っている。よって，多文化アイデンティティの揺らぎを体験している個人がどのようにしてそれに耐え，どのような内なる対話ならびに自己表現を展開し，どのような成長を遂げるかどうかは，その社会に所属している個人ひとりひとりがどうであるかということを抜きにできない現象なのである。これまでのように異文化のはざまにいる個人がどのような適応や自己形成を行うのかどうかではなく，多文化アイデンティティの揺らぎを体験している（あるいはその可能性を秘めている）個人が存在する社会が，そして，その構成員ひとりひとりがどのような適応や自己の位置づけ方をするのかということが問われる時代となっているのである。

2. 多人種アイデンティティ

多人種アイデンティティに関する日本の先行研究はかなり少なく，あえて人種という概念を通して捉えることへの関心が集まりにくいと思われる。

一方で，欧米諸国において人種問題はかなり古くから存在している。科学の発展とともに，人種の問題においては知能や身体能力，犯罪率までもがその遺伝的な違いに則った説明を試みる対象となる研究が多くなされてきた。しかし，DNA 分析による遺伝学の進歩に伴い，人種という分類法が妥当ではないという見解が学術的な世界において広がりつつある（斎藤, 2005)。Hermans（2016）によると，人種はすでに遺伝学の問題ではなくなり，社会構造のひとつであるとう捉え方が求められている。例えば，F と G という 2 つの人種の間に非常に鋭い社会的な区別が存在していても，遺伝的な区別はかなりあいまいであることが少なくない。つまり，グローバル社会においてその人種がどのような位置づけをされているか，他の人種との間にどのような歴史的ならびに社会的関係性があるかによって，そのはざまで生きる個人の自己理解も自己同定も，振り分けの対象となる人種的カテゴリーさえも変わってくるのである。そうした社会における不安定で緊迫した空間は多人種アイデンティティを創発させうるが，多文化アイデンティティ同様に，それは自己の世界に対して統合的にも崩壊的にも機能しうるものである。

3. トランスジェンダー・アイデンティティ

トランスジェンダーとは，自分の性別に違和感がある人の総称である（平田，2011)。近年日本においても「LGBT」[3]という言葉を頻繁に見聞きするようになり，日本心理臨床学会や日本全国学生相談学会においては性的マイノリティのメンタルヘルスに関する議題提供や研究報告が目立つようになった。

Hermans（2016）によると，自分の中に男性的な自分と女性的な自分が存在することはアイデンティティ拡散またはトランスジェンダー・アイデンティティの創発につながる。一方で，生物学的な性，社会学的な性のほかに，「女性であること」「男性であること」はそれぞれに独特な情緒的体験をも伴うものでもある。性的マイノリティのうつ病や不安障害，自殺念慮や自殺企図の割合が一般のそれよりも高いという調査結果がしばしば報告されるが（平田，2011)，性転換手術後の自殺率の高さも特徴的である。自身がトランスジェン

ダー的であることに気付く過程，周囲と折り合いをつけていく過程における揺らぎだけでなく，特定の生物学的性を失うことによりそれまで自己の世界において保てていた対話的関係が崩れ，自身の生物学的･社会的･情緒的な性に対するポジション（位置づけ）が大きく揺らいでしまうことが示唆される。

4. ラジカル化されたアイデンティティ

今回のルブリン大会で得に反響が大きかったのが「ラジカル化されたアイデンティティ」に関する議題提供である。先の３つのアイデンティティが自己そのものや，こころの小社会として内在化された社会現象に関連するいくつかのポジションの存在によって生じる不安定で緊迫した空間の中で，何らかの対話的関係が展開することによって創発するものであるとしたら，ラジカル化されたアイデンティティはそうした空間を避けることに起因する。

現在，ヨーロッパ社会において問題となっていることのひとつに，イスラム国に憧れる若者たちの姿がある。それは単なる憧れではなく，イスラム国に向かい忠誠を誓ったり，ヨーロッパに戻ってテロなどの殺人を行ったりするという行動でもある。現代若者にいったい何が起きているのか，なぜ民主主義的社会の中で育った人々がそうでない社会の人々にひかれるのか。

Hermans（2016）が提案するのは，対話的自己論の不定性という概念を用いた解釈である。先に述べたように，多様性，流動性，多義性そして予測不可能性を持つグローバル化において，自己の世界においても多様なポジションが創発し声を持つため，不定性の体験は必然的である。しかし，普遍的な真実への追及をもとに一貫性と全体的なまとまりを持つモダン的自己の世代と異なり，多様かつ流動的で，ともすればバラバラで，あいまいな基準しか持ちえないポストモダン的自己の世代である若者にとって，この不定性はかなり危険で絶望的なものとして体験されていることが示唆される。それは，個人の自己の世界において何が主体で何が客体であるかという区別さえもなく，常に計り知れない不協和音が響いているような体験に等しい。

こうした不定性を解決するもっともシンプルな方法は，何かひとつの非常に強力なポジションに支配性を持たせることである。そうすることで，その他にある多数のポジションを「それ以外」という比較的シンプルな全体像にまとめ上げることが可能になる。現代若者にとっては，厳格な宗教や独裁主義を追い求め，それに同一化することが，不協和音によって崩壊しそうな自己のバランスを保つ手段となっているのだ。

この場合，様々なポジションを客観的な視点から捉えるメタ・ポジション（meta-position）は機能しない。メタ・ポジションを持つということは，今・ここでのポジションの支配性や，ポジション間の対話的関係の客観性を問うことであり，問いがあれば，そこには再び不定性が創発する空間が生じてしまうからである。つまり，先に選んだひとつの強力なポジションにすべての支配性を持たせることで一切の不定性に伴う矛盾や葛藤を回避するのであり，自己は周囲の世界や自己そのものが持つ可能性から遠ざかるようにしてその境界線を色濃くし，自らを閉ざしていくのである。

社会的な現象として捉えると，現代社会はグローバル的であることよりも，ローカル的であることを選んでいることが伺える。そして，自己のありようとしては，「個人」としての存在を問う

図４　基調講演中のHermans教授

たり，多様性に身を投じたりすることよりも「集団」としての存在を第一とし，議論の余地がない（つまり不定性が創発しない）ほどの厳格な宗教や独裁主義という安定に向かうことがひとつのプロセスとして起きているようだ。

この状況への打開策として，Hermans（2016）は不定性を回避することではなく，むしろさまざまなポジションや，そこに生じうる不安定で緊迫した空間を積極的に体験することを通して不定性への対処の幅を広げること，特に自己の対話性を身に着けることの必要性を主張した。そして，それが実現しうる場として広い意味での教育（education）の重要性を強調した。

5. 現代病としてのうつ

では，なんらかの理由によりそうしたラジカル化ができない場合，人はどうなるのか。これに関しては，M.Foucoult が提唱した社会の動向と精神疾患の関連性について対話的自己論の視点から追求した Strozak（2016）の報告が興味深かった。

1）モダン的自己と神経症

J.Charcot や Z.Freud をはじめとし 20 世紀盛んだったのがヒステリーなどの神経症に関する研究や治療実践である。神経症とは心因による精神疾患のひとつだが，処理しきれない精神的葛藤を抑圧することで様々な身体症状や精神症状が生じるというメカニズムが注目されてきた。

モダン的時代に相当する 20 世紀においては，第一次ならびに第二次世界大戦の悲劇を体験した世代がよりよい社会を作るという普遍的な理想像への信念をもとに協力と関係調整を目指しており，それに伴いルールの厳守，ならびに，一貫性を持ち全体的にまとまりのある自己の形成が求められてきた。そのため，ルールやあるべき自己像と対立するようなポジションが生じた場合，個人は葛藤を体験するのだが，その過程の中で先の社会的な信念と対立するポジションを否認あるいは抑圧することで安定を取り戻そうとする心理的な動きが生じ，その結果神経症を患うのだと思われる。

2）ポストモダン的自己とうつ

近年ではうつ，特に従来のように罪悪感を主とした葛藤ではなく，漠然とした万能感と不全感を併せ持ち，引きこもりなどの回避的行動をベースとした，いわゆる非定型うつ病が若者の間で増加していることが問題視されている。

ポストモダンに相当する現代社会においてはいくつもの方向性や解釈が存在し，互いに絡み合い，常に変化し続けている状態が当たり前である。そうした環境においては力を合わせてなんらかの一貫性や全体的なまとまりを目指すことはもはや不可能に近く，個々人が様々なポジションの多様性を受け入れ，状況に合わせてそれらを臨機応変に選択していくことが求められてくる。つまり，内的な葛藤を体験し，抱える力はもはや必要ではなくなったのである。

しかし，ここでひとつの矛盾が生じてくる。多様性や選択の自由を得た現代の自己は安定や選択の基準を放棄したのであり，よって，その多様性と自由をどう扱えばいいのか分からなくなってしまったという逆説的な状況に置かれてしまったのである。そこで生じる空虚感と内的混乱を解消するために，個人は一切の選択をすることを放棄し，さらには，いかなる内的ポジションの声もが聞こえてこないために心の活動水準を自ら低下させてしまうのである。そうした無気力，精神的エネルギーの低下，引きこもりや苦手なことの回避などの症状はまさに非定型うつ病そのものである。

6. 否定の先にあるものと対話性

ラジカル化されたアイデンティティやうつ病という，否定を主な手段とした安定への追及は予後が悪いようである。Leontiev（2016）によると，他者をはじめとし，周囲や内的な世界にある様々なポジションとの間になんらかの関係性を持つことを否定するほどに，そして，自己を閉ざしてゆくほどに，その世界はより予測やコントロールが難しいものへと変わってゆく。多様性や不定性を否定しそこから回避するほどに，我々は自らをますます危険で不安定な状況に立たせてしまうことになる。

では，複数のポジションがひとつの自己内フィールドで出会うことがアイデンティティの変化や成長をもたらすためには何が必要か。Batory（2016）によると，アイデンティティが内包する

内容的側面よりも，アイデンティティ間，よってはポジション間の対話性が重要となってくる。例えば，多人種アイデンティティの場合，白人か黒人かというところを二分法的につきつめようとするよりも，自己の世界にある白人的なポジションと黒人的なポジションの対話的関係を刺激する方が構造的なレベルでのアイデンティティ変化が望めるのだ。

V. おわりに

20世紀の社会学的ならびに心理学的研究において多様性や多義性は個人の成長を促し，一つの環境に縛られなくてもよいという意味において自己の社会適応をサポートするものとして捉えられ，関心を寄せられてきた。しかし，多様性や多義性が生き方の選択肢のひとつではなく，もはや避けられないものである現代社会では，そこに伴う危険性を十分に認識することが必要であろう。また，十分な導き（guidance）なくしての自己の適応も難しいことが分かってきた（Hermans，2016；Strozak，2016）。では，何を導きとするのか。厳格な宗教や独裁主義，ナショナリズムばかりがそうだと限らないということを信じたい。先にHermans（2016）が主張した広い意味での教育もそのひとつであろうが，現代の若者にとってどんな教育がこの多様性や不定性の中で生き抜くための導きとなるかを今後に向けて考えていきたい。

文献

Anna，Batory.（2016）：Internal Dialogue as a Mechanism of Identity（Re）Construction，Invited Symposium at the 9th International Conference on the Dialogical Self，the 8th of September 2016，Lublin

堂本暁子（1987）：国際人より世界人―これからはじまる海外子女の時代，海外子女教育，168，pp.16-18.

原裕視（1995）：異文化接触とアイデンティティ―問題提起にかえて，異文化間教育，9，pp.4-18.

Hubert，J. M. Hermans.（2016）：The Dialogical Self in the Context of Social Power，Keynote at the 9th International Conference on the Dialogical Self，the 8th of September 2016，Lublin.

Hubert，J. M. Hermans.，Harry，J. G. Kempen.，& Raoul，Van Loon.（1992）：The dialogical self：Beyond individualism and rationalism，American Psychologist, 47, pp.23-33.

Hubert，J. M. Hermans.，& Harry，J. G. Kempen.（1993）：The Dialogical Self：Meaning as Movement，195p，Academic Press，Cambridge.（ヒューバートJ. M. ハーマンス，ハリーJ. G. ケンペン（著），溝上真一・水間玲子・森岡正芳（訳）（2006）：対話的自己―デカルト／ジェームズ／ミードを越えて，282p，新曜社.

Hubert，J. M. Hermans.，& Agnieszka，Hermans-Konopka.（2010）：Dialogical Self Theory：Positioning and Counter Positioning in Globalizing Society，404p，Cambridge University Press，Cambridge.

平田俊明（2011）：性的マイノリティのメンタルヘルス，心理臨床の広場，3（2），pp.28-29.

Dmitry，Leontiev.（2016）：Existential Meaning of Dialogue in Human Communication，Invited Lecture at the 9th International Conference on the Dialogical Self，the 8th of September 2016，Lublin.

Stepehn，Murphy-Shigematsu.（2004）：Multicultural Encounters：Case Narratives from a Counseling Practice, Japanese Edition，242p，University of Tokyo Press.

溝上慎一（2001）：大学生の自己と生き方―大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学，239p.，ナカニシヤ出版.

溝上慎一（2008）：対話的自己論―ジェームズ以来の自己論の限界を超えて現代青年期を理解する（青年心理学研究法セミナー），日本青年心理学会大会発表論文集，16, pp.16-19.

李正姫・田中共子（2010）：在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度とメンタルヘルス（1）―文化的アイデンティティの自己認識に関する面接調査，岡山大学大学院社会文化科学研究紀要，30，pp.177-196.

斎藤成也（2005）：人種よさらば　竹沢泰子（編）人種概念の普遍性を問う，人文書院，pp.468-486.

関口知子（2003）：在日日系ブラジル人の子供たち―異文化間に育つ子供のアイデンティティ形成，461p，明石書店.
末田清子（2012）：多面的アイデンティティの調整とフェイス（面子），159p.，ナカニシヤ出版.
鈴木一代（2008）：海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成，327p，ブレーン出版.
Maria，Strozak（2016）：Mental Disorders in the 20th Century and 21st Centuries as cultural phenomena and as indicators of changes in identity and self-structure；The Dialogical Self Theory Perspective and the Cultural Studies Approach，Invited Symposium at the 9th International Conference on the Dialogical Self，the 8th of September 2016，Lublin.
知念聖美（2008）：二言語で育つ子どものアイデンティティ　佐藤群衛・片岡裕子（編）アメリカで育つ日本の子どもたち―バイリンガルの光と影，明石書店，pp.172-190.

1　自分がある文化に所属しているという感覚（文化的帰属感），あるいは意識（文化的帰属意識）である（鈴木，2008）
2　日本における先行研究では，「多文化」という言葉をここ数年で見かけるようになったものの，「多文化アイデンティティ」という概念を用いた研究は筆者の知るところない。ここでいう多文化アイデンティティはHermans（2016）が基調講演にて用いたものとする。
3　どのような性別の相手に恋愛感情や性的欲求を抱くかという「性指向」のうち，レズビアン（女性同性愛者），ゲイ（男性同性愛者），バイセクシュアル（両性愛者），トランスジェンダーの頭文字を組み合わせた造語。